

第百三十七話 至誠は通ず！

手元に、本日購入した「日本の誇り 103 人」(光明思想社刊 岡田幹彦著)がある。産経新聞に連載(平成 21 年 1 月から毎週一回)された「元気の出る歴史人物講座」103 話が単行本化されたものである。その 103 名中には軍人(明治以降)が 26 名挙げられており、うち 10 名が大東亜戦争に従軍している。本メモランダムで既に紹介したのが、栗林忠道(39 話、46 話)、今村均(129 話)、大西瀧次郎(53 話)、中川州男(29 話)、牛島満(名前のみ、69 話)である。残る 5 名は、藤原岩市(66 話で一部紹介)、岡田資、柳川宗成、黒木博司及び仁科関夫である。今話では、大東亜戦争の戦争目的達成に寄与した二名藤原岩市及び柳川宗成を簡単に紹介することにする。一部 wiki 等から関連事項を追記している。残る二名は次話に譲る。



1 藤原岩市陸軍少佐(士 43 期)：インド独立の母と讃えられた藤原機関(20～21p)

F 機関長藤原少佐は、マレー半島進撃中、投降英軍のインド兵によるインド国民軍を結成し、これが後のインド独立の礎となった。投降兵との親睦を図るため、インド料理による機関員とインド人将校との会食を催した。初めて口にする激辛の料理を、インド人に倣い手掴みで食べた。インド人将校はこの藤原の態度に感激し、「敵味方、勝者敗者、民族の相違を超えた暖かい催しこそは、一昨日来、我々に示されつつある友愛の実践と共に、日本のインドに対する誠意の千万言に優る実証」と将校代表は述べた。インド独立第一の英雄と仰がれるチャンドラ・ボースとも肝胆相照らす仲となった。差別意識のない、誠意ある態度こそ、全てに優ることを教えてくれる。

尚、ボース率いるインド国民軍は、日本軍と共にインパールに進撃して敗れた。然し、この祖国解放の戦いを敢行したことが、結局インドの独立を導いた。

また、後に F 機関を発展解消して岩畔英雄を長とする岩畔機関を作ったことを付記しておく。

2 柳川宗成陸軍大尉：インドネシア独立戦争を支えたもの(148～149p)

インドネシアは、4 年間の対オランダ独立戦争を戦い抜き、独立を果たしたのは、昭和 24 年である。この戦いの中核は、日本軍が創設した祖国防衛義勇軍であり、この義勇軍の基礎になったのが、タンゲラン青年道場である。その隊長こそが 16 軍参謀部の柳川宗成中尉である。昭和 18 年 1 月、インドネシアの青年 50 人と寝食を共にし、一体となって猛訓練を続けた。訓練開始に当たり、「一日一刻も早く我々から学び得る全てのものを学び、強く、正しく、新しいインドネシア青年に生まれ変わって貰いたい。そして、諸君自らの手でインドネシアを解放して貰いたい。今日からは私が諸君の父だ。各班長は母と思え。その他の教官は全て兄弟である。何事もよく相談せよ。」と訓示した。人種差別を受けてきた彼等に人間として対等に接し、兄弟扱いして呉れる柳川等の誠意に、青年達は心から感激し、逞しい戦士として新生した。軍事訓練とともに重視されたのは精神教育であり、そこでは日本軍の軍人勅諭が用いられ、祖国のための自己犠牲の尊さ、闘う勇氣などについて、インドネシア人青年は徹底的に教え込まれた。

* 最近でこそ人種差別には厳しい非難が浴びせられるが、大東戦争当時は、人種差別が横行していた。日本人も酷い目に遭ったのは記憶に新しいし、同盟国の総統は激しいレイシストであったし、敵国大統領もそうであった。パリ講和会議(1919)で「人種差別撤廃」を提案したのは他ならぬ日本であった。日本が完全無欠だったとは云わないが、他の諸国に比較すれば日本人ほど、寛容な者は居ない。相手に対する誠実さ、差別なき真の愛情、惻隱の情は、必ず相手に通ずるものである。この二例はそれを示している。

(第百三十七話 了)